

パウル・ツェラーンにおける傷痕としての書字

伊 藤 幸 子

それに対して「(言葉が)一言も発することの出来なかった」(Gesammelte Werke. Bd. 3. Frankfurt a.M. 1986. S. 186)アウシュヴィッツという体験を経た、二十世紀の詩人パウル・ツェラーンにとって、過去の記憶を歪めることなしに現在へともたらしことは、必然的な詩的要求であったと言える。そして、この「記憶」の現在性を詩において達成するという要求は、良かれ悪しかれツェラーンの詩作の方向性を一貫して規定し続けることになる。

ツェラーンの「記憶」という場合、しかし、そこには二つのレベルが存在していることに留意しておく必要がある。というのも、(1)「過去」を主体の同一性を何ら脅かすことのない、主体自身の物語へと回収してしまうこと(回想)が一方にあるとすれば、それは、(2)主体を脅かす可能性(=他者性)を多分に含んだ「過去」の主体に対する襲撃に対して、無防備に身を晒すこと(記憶)とは、全く区別されねばならないはずだからだ。

第一詩集『罌粟と記憶』(1952年)に収められたテキストで扱われているのは、ほとんどの場合(回想)の方である。この時期のテキストの多くが描き出すのは、羊水にも喩えられるであろう平和な、時の流れぬ空間の中で、互いに対する他者性を欠いた、初期ツェラーンのカップル「私」と「お前」によって営まれる、潜在的には絶えず死に侵食されながらも、結局は心地よく生ぬるい「夢」や「まどろみ」なのであって、(記憶)の他者性という困難な事態は未だ明確に自覚されてはいない。

第2詩集『敷居から敷居へ』(1955年)では、『罌粟と記憶』でわずかに予感されるにとどまっていた様々な問題が、徐々に表面化してゆくことになる。ツェラーンはこの詩集において「まどろみ」という敷居から「覚醒」という別の敷居への移行を開始する。この移行を促すのが、この詩集ではじめて現れる「声」という形象なのだが、ここで「声」は同時に、主体が忘れ果ててしまった己の(記憶)、あるいはそれが必然的に内包する他者性を明かす秘密の鍵としても希求されている。だがこの鍵があらかじめ失われていることを、続く第3詩集『言葉の格子』は明らかにしてしまう。

1959年に刊行された、この『言葉の格子』という詩集が最終的にたどり着くのは、「草の途切れ途切れに書かれた敷地」(Bd. 1. S. 197ff.)という、主体の同一性を支える連続体としての「声」の、徹底した不在の光景である。この「声」の不在(ないしは遡行不可能性)の確認は、ツェラーンの詩世界に「言語」という問題の不可避性、またそれと同時に「記憶」の不可能性を突きつける。しかし、それによってこそはじめて、「詩という場への他者性の回復」というツェラーンに真に固有の問題は、それに相応しい振幅と深みを獲得することになるのである。